
見せておくれ

キョウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見せておくれ

【Nコード】

N2476N

【作者名】

キヨウ

【あらすじ】

幼き日の厩戸皇子と、突如現れた墨染の男。玩具を見つけた子供のように、その男は笑っていた。【幼児——とまではいきませんが少年と黒イカのお話です】

過去逸話注意。

（前書き）

幼き日の厩戸皇子と、
突如現れた墨染の男。
玩具を見つけた子供のように、その男は笑っていた。

幼児——とまではいきませんが少年と黒イカのお話です。
過去逸話注意。

「ほお……俺が“見える”のか……——」

墨染の男はそう言つてふつと不適に冷笑した。妖艶な笑みだ。眺めているだけで、何かを吸い取られていくような錯覚を覚える。冷めた瞳は笑うことなく、ひややかに少年を見下ろしていた。

広大な楼閣の、唯一少年が入ることの赦された仏壇の有る広間でのことだった。

——お前は直に儂を継ぐのだ。

王である父の言葉が脳裏を過ぎる。なぜだろう。彼の紅い双眸を見詰めていると、過去のことばかり湧き上がってくる。

——類い希なる才能。

——神の御子の君臨だ。

——きっと光の路へ導いて下さるであらう……。

皆、口を揃えて自分を『賢者だ』『御子だ』『聖なる逸材だ』と崇め奉った。仰ぎ見る民の顔を、しかし少年は直視出来ないでいる。

凍てついたのでと気づいたのは、いつだったか。

父の命じるがままに堂に籠もって、今日この日まで誰にも顔を合わせず祭祀を行ってきた。つまらないなど戯れ言をぬかしている場合ではないことは判っていた。自分は『御子』なのだ。だから神に

願い続けなければならない。

驚いた。

鍵のかかった門前には衛士が控えており、蟻一匹通ることを許さないはずだ。それに戸は全て閉め切っている。侵入すれば例え祭祀に集中していたとしても少しは気付くというものだ。

だが、彼はそれを全てすり抜けて来たと言いたげに、飄々とした面持ちで自分の背後に立っている。

否、“立っている”というのは正確な表現ではない。爪先が床に着いておらず、不可視の紐が荒縄に吊されたように、体重というものを感ぜせないように床との一定の距離をもっている。——つまりは“浮いている”のだ。

彼は暫し口許に弧を描いたまま、少年を蔑むように見下ろしていた。

何かを試しているのか。見下ろす瞳は透き通った紅玉の色なのに、禍々しいものを孕んでいる。

だが少年には、それが妙に悲しげに見えた。

「はーん、成る程。聖者の血が流れてる。なら視えても道理だな」

彼は傲然と腕を組んでそう呟いた。

あらぬ方に目をやる男に、少年はようやく口を開く。

「あ……、あな——」

「ん？　ねえ君、自分より立場が上の人には自ら話しかけちゃいけないの、知ってるよね」

「……………」

上なのか？ この人が。

だが理論上人間が宙を浮遊するなどあり得ないし、よもや有名人となった自分の地位を知らない人間など数少ない。

ならばこの人は自分の正体を知りながら、さも当たり前のように見下しているのだ。実際そうではないとも限らない。

半分向いていた身体を完全に向けて姿勢を正し、改めて黙然と対峙する。これこそ厳しい教育の賜物だろう。

男はその様子を満足そうに眺めた。相変わらず目だけは笑っていない。

「いいだろう。さつ、君の質問に答えてやろうではないか」

あの一言で既に質問形だと気付いたのか。

「あ、貴方は――」

「あつ、そうだ」

男は又も言葉を遮ると、さも面倒臭そうにひらひらと手を振った。

「普段の話し方でいいよ。俺、堅っ苦しいのは嫌いなんだ」

「……お前は、普段なら“視えない”のか……？」

すると男はにつと目を眇める。

「当たり前。稀に居る見鬼けんきの才に長けた奴は“見える”かもしれないけど、大抵は視えもしなければ存在を感じることすらままならな

いだろうな」

「んじゃ、お前は鬼なのか……？」

身を乗り出して尋ねる。

彼は不機嫌そうに眉根を寄せた。

「あのね、俺をそこら辺の野蛮な輩と一緒にしないでくれるかな。仮に君が御子だとしても、関係なく怒るからね」

それじゃあ……と紡ごうとしたその時、突然彼は少年の鼻面に指先を触れさせていた。

いつの間に動いたのか。人間の視覚を超越した動きを見せたのだろうか。

「それよりさ、君の名前を教えてよ」

不適に笑うその口調には、底知れぬ何かが渦を巻いているように思えた。不用意に名乗ってはならないと必要以上に教えられていた少年は、たぶん冷や汗を流しながら思考をフルに働かせていたことだろう。

しかし、彼の口から次に洩れたのは。

「“厩戸皇子”。飛鳥時代の皇族。橘豊皇子の第二皇子であり、穴穂部間人王女の息子。蘇我の一族の一人。幼い頃から数々の才能を発揮し、世に現れた神の御子として崇められている。だが本人にその自覚は全くなく、渋谷父君の命令通り堂に監禁され、先刻必死の思いで祭祀をしていた。……誤りがあるなら訂正してくれたって構わないよ」

男がスツと手を離す。

しかし、少年——厩戸は、元の姿勢に戻る男を啞然と凝視したままでしかいられなかった。

誤りなど何一つ無い。そして先刻までの自分の行いを、心境を、悉く言い当ててみせた。

闇色の髪を手で払い、男は挑むかのような視線を向けてくる。陶器のように白い面は血の通わない死人を連想させ、繊細な指先に備わった爪は普通のそれより少し長い。見慣れない簡素な衣装を纏っているも、醸し出す雰囲気は人間とは確実に違うもの。何より被った冠には『大王』と判りやすく綴られていた。

「そんなに驚くことじゃないよ。そうだなあ、俺の正体が判ったら、教えてあげてもいいかなあ」

男が笑う。蔑むように、しかし新たな玩具を与えられた幼子のように、愉しげに。それがかえって不気味だった。

厩戸はふと背後に飾られた仏像を顧みた。金色に輝く像は人の形を装っているものの、本性は神と呼ぶべき天の住人なのだ。

再び男へ視線を戻す。彼は薄い笑みを浮かべていた。

「かみ……さま……？」

「そ。やつと判ったか」

口調に反して男の様子は少し嬉しそうだった。じゃあ、と神らしき瘦躯の男は問いかけを続ける。

「本名じゃなくていい。通り名……そうだな、通称の名を当ててみな」

これには厩戸も目を見張った。判るはずもない。

だって、今まで教えられてきた神と、その男はあらかさまに別物の容姿をしていたのだから。

しかし判らないとも言えず、空中で胡座をかく男を隅々まで凝視する。

「そうだ、これじゃ面白くないからね。ヒントをあげようか」

人差し指を立て、男は潜めた声で挑む。

「ヒントき、君達が思ってる以上に冷酷な男だよ。ヒント式、確かに君を軽蔑している」

楼閣はひっそりと静まり返っていた。まるで、彼等の空間だけ別次元に切り取られたよう。話し声などしていたら、誰かしら衛士が駆けつけて来るというのに。

「ヒント参……、俺は人間が嫌いだ」

その時厩戸は、紅い双眸の奥に蜷局を巻いた黒い靄を確かに見た。

「一応全部言っただけど、まだ判らないかな。案外簡単だと思うよー」

すると男は立つかのように胡座を解くと、すいと身体を翻した。肩越しに笑みを見せ、瞠目する厩戸を顧みる。

「次、会った時に答えを聞こうじゃないか。君は面白そうだからね、少しは退屈しのぎになりそうだ。じゃっ——」

男の姿が空気に溶けた。

あの冷たい笑みすらう思い出せない。しかし、最後の余韻だけは、いつまでも耳の奥で反響していた。

約束だよ。

君が——時、

もっと俺を楽しませておくれよ。

苦しみに歪む顔を、

もっと

——「見せておくれ」

(後書き)

幼き日の厩戸皇子と、

くあとがき々

はい、すまーん！

書いてて意味判らなくなってきた。ですから意味不な終わり方でも許してくださいッ！

私の書く閻魔はなぜか黒が多い…… (x|x:x;)

此の話は別作『哀れ偽善者へ囁く』に続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2476n/>

見せておくれ

2010年10月10日20時47分発行